
東方【 I F 】の平和世界

榊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方【IF】の平和世界

【Nコード】

N0320BA

【作者名】

榊

【あらすじ】

狂王物語、悲劇と狂気、そして血に塗れた絵本は既に終わり、彼女達は世界の表から姿を消したのだった。そう、既に幕は閉じられ、狂気の絵本は終わったのだ。コレは【番外編】だ。せめてあの戦いの後、彼女達が平和でありますように。

プロローグ（前書き）

帰って来ました、プロローグと言う事で短めです。

プロローグ

今日も今日とてそこは平和だ。外の世界の様に文明が発達してないかもしれない。時間のゆっくり流れるその場所の名前は幻想郷。少し前に大きないざこざがあつたが、今では平和な物だ。

今日も紅白の巫女がため息を吐く、こたつと言う外の世界から流れ着いた物に豆炭を少し足して弾幕で火を付ける。弾幕と言っても小さな火の玉的な物だ。

「よう！霊夢、今日も遊びに来たぜ！」

「魔理沙・・・この寒いのに何でそんなに元気なのよ」

「私にはミニ八卦炉があるからな、これに少し力を送っておけば発熱して暖かいのぜ」

「羨ましいわね、家にはこの炬燵位しかないから寒くてね」

「稗田の家に行けば暖かいんじゃないか？あそこにはもうアイツも帰って来てるんだらう？」

「ああ、朝霧の事ね」

朝霧とは、この幻想郷が出来る以前から協力していた者の事だ。白銀の長すぎる髪に陰陽服、そして雪以上に白いかもしれない肌。無名の神、人間の賢者と呼ばれている。

そして、この世界線の稗田阿求は稗田阿礼以前の稗田、稗田阿明の頃にその朝霧と婚姻し、今、九代目で再開、稗田は不老不死の存在に成っている。周囲に降り積もる雪すら解かすバカッブル、いや、

馬鹿夫婦だ。

「あの家に行くと阿求の視線が痛いだよ」

「あー・・・解るぜ。あの目は地霊殿に行く前に見た・・・あのパルスィ・・・だったか？同じ目だからな」

「うおー！霊夢！雪だ雪！」

「っさいわね萃香、鬼は良いかもしれないけれど私達は寒いのに！障子を閉めてくれないかしら！」

外の世界では雪が降れば子供が喜ぶと言うが、本当であろうか。今一解らない。自分がこの神社を先代博麗から継いだ時から雪で遊ぶ事は全くしていなかった記憶がある。どちらかと言うと雪掻きが面倒だ。一度魔理沙にマスタースパークでお願いしたが、神社ごと綺麗に掃除されてはたまったモノではない。

「こう言う日には宴会に限るぜ！」

「馬鹿なのね、魔理沙って。どう考えてもこの寒いのに敷地内で酒を飲むって言うのも寒いでしょうに。ソレにこの時期紫は冬眠している筈よ」

「ソレは違つぞ霊夢」

瓢箪の中からわき出る無制限の酒を煽っていた萃香が瓢箪から口を放す。キュポツと音がした後に銀色の糸が瓢箪と彼女の口を繋ぐ。それを乱暴に拭いアルコールの入った瞳で霊夢を見た。

「今年は何を持ったか起きてるらしい、式から聞いた」

「式・・・？ああ、あの狐ね」

「紫の保護者だぜ・・・あの狐」

八雲藍、彼女は苦労人とも言えるレベルだ。全員その光景が頭に浮かびうんうんと首を縦に振る。

「それにしても何の冗談かしら、あの妖怪が起きているなんて」

「何でも今年は初日の出を見るとか言ってたらしいよあ」

そう言うとき萃香は急に横に成り、そのまますぐに規則正しい寝息を立て始めた。おやすみ三秒とはまさにこの事であろうか。その内鼻提灯の出て来そうな彼女のとろける幸せそうな寝顔を見ると少し腹立たしくなってきた。

「にしても、この鬼は本当に最近よく寝てるよなあ。山の神社にも出沒して、鳥居の上で寝てたって聞いたぜ？」

「まあ・・・萃香だから良いんじゃない？あの山の神社の神とは呑み友達とか言ってたし」

「うげ、神すらコイツの侵入を阻めないのかよ」

「粗ぶれば鬼、静まれば神と言うでしょうに」

そう言うとき霊夢は彼女に薄い布団を掛ける。彼女の優しさであろう。博麗神社は、今日も平和で、それでも何か、物足りなさそうであっ

た。

プロローグ（後書き）

短い物しか描けません、これらかもよろしく願います。

薪はいらんかね？（前書き）

狂王物語、その中の人物数人が登場します。

薪はいらんかね？

息を吐くと白く曇り、空には蒼穹の空に白昼の月が浮かぶ。寒い季節だ、ソレも今日は異常に寒い。戸を開けてもそこにあるのは土色の地面だけで、遊ぶほどの雪はまだ積もっていない。子供なら心底心を躍らせる事だろう、しかし今の自分にとって雪はただの冷たい物であった。

歳はとりたくない物だと寺子屋の教師である慧音は腰を戸を全て開けた。家の中には優しい光りが入り込み眼を細める程に眩しい光りを手でさえぎる。

それと同時に、彼女は朝から大きな声を上げた。それもそうだろう。庭先に全身を甲冑で包んだ人物が立っていれば驚かない筈がない。しかもその手には鈍く光る剣を持っている。

「だっ誰だお前！？」

『声で判断しろ』

「朝霧か！？何でまたそんな恰好で！！」

朝霧八雲、人間の賢者は非常識とも言えるほどの恰好で登場した。

『五月蠅い、薪はまだ足りてるか？』

「ま、薪か？それならまだあるが・・・」

『そうか、では次に行く』

そう言つてガシャガシャと音を立てて出ていく朝霧に慧音は声を掛ける。とりあえずその鎧を脱げ！と。

そして、彼女達は今、炬燵に豆炭を入れてお茶を啜っていた。もちろん朝霧は鎧を脱いでいる。

「何で朝からあんな恰好していたんだ・・・」

「何故って、あの鎧は耐寒術式も兼ねている。驚きの温かさだ」

「他から見ると恐ろしく無気味なんだよ！！何で剣も持っていたんだ！！」

「薪を切つて来てな、ソレに使っていた」

その言葉に慧音はガクツと頂垂れる。何処まで世間体を気にしていないのか。それでも子供に好かれているのだから全く意味が解らない。そんな慧音の考えを無視するかのように朝霧は袖の中から毬を取り出し転がして遊んでいる。

「そんな名刀を使う事じゃないだろうが！」

「使わずに錆びさせるのも駄目だろう！？」

刀などは使うと血糊などで錆びたりします。何もしなくても確かに酸素に触れて錆びますが。

「それでもあんな恰好してれば不審者として妖怪の賢者たちが大騒ぎするぞ！？」

ソレはそうだろう、彼女は生前、鬼武者として恐れられていた元人

間だ。そんな人物が刀を振り回しながら完全武装していれば誰もが警戒するだろう。

『あ、また降って来やがった・・・』

「ソレはしょうがないだろう・・・この寒さでこの季節だ」

『寒波まで幻想入りするもんかねえ・・・』

「ソレは無いだろう、此処でコレだけ寒いんだ、天界なんて極寒だろうよ」

『地霊殿にでも行こうかなあ。あそこなら温かいだろう、地熱で』

「温泉か、だがあそこは鬼にすぐ絡まれる」

地底は地上では危険な妖怪の集まりだがこの数百年の間で妙に丸くなった者が多い。今では観光に行く者も多く、地霊ではソレを迎え入れる宿まで建設された。

因みに、名物は古明地饅頭と地霊温泉卵。

『酒の飲みが多いのはしょうがないさ、皆暇なんだ』

「だが平和が一番だろうに」

『今度異変でも起こすかなあ・・・』

「犯罪勧告は止める」

本当にやりかねないのだ。昔にも異変を起こそうとした事があった

し、実際に山の神社を壊滅一步手前まで追い込んだ事がある。

『はぁ・・・あつたまるなあ、動きたくねえ・・・』

「お前、いま威厳も何も無いぞ」

『良いんだよ、何時もピリピリしてると疲れるだろう』

山の神しかり、新しく異変を起こした連中同じく、だ。最近あのキ
ョンシーと妙に仲良くなってしまったと思う朝霧。まあお互い既に
アンデッドなので通じる物があるのだろう。その他にも布都とか言
う人間？ともよく話をしている。まあ、どちらかと言うと孫の感覚
に近いが。

「それにしても、昔は戦闘狂だったお前は良く落ち着いたなあ」

『五月蠅いよ小娘、私から見ればお前もまだ私の半分も生きていな
いんだぞ？』

「この時間の停止した幻想郷でその言葉が意味を持つとも思えない
けど？」

『はは、確かにのお』

そう言う彼女が遊んでいた毬を袖の中にしまった。しまったかと思
うと次は普通に立ち上がり鎧を装着した。剣は腰の鞘に収まっている。

『私はそろそろ行くよ、美味しいお茶をありがとうな』

「何だ、やっぱりその恰好で回るのか、変人扱いされるぞ？」

『男から女神に成った時点で私は変人かと思うがね？』

「・・・(汗)」

豪快に笑うと彼女は赤黒いマントを靡かせながら白い雪が降る中へと進んで行った。次は誰の家に行くのであるうか、不安しかない。それより、誰の家に行くと言うより次は誰が犠牲者かと聞いた方が良いのかもしれない。

「あや？こんな朝早くからどうしたのですか慧音さん」

「文か・・・いや、お前に教えるところで無い事になりそうだな」

「大丈夫ですよお、清く正しく、射命丸ですよ？」

「お前そう言いながら前、紅魔館の吸血鬼の母を怒らせてただろう？」

紅魔館に住む吸血鬼姉妹の母、本名は既になく、宝石の翼と蝙蝠の翼を持つ髪の長い吸血鬼でシングルマザーである。男性を必要としない出産方法を試した結果、シングルマザーに成ったのだ。そして不思議な髪色をしている。金髪と青髪が混じった様な色の髪の持ち主である。

「ですが、今からでも遅くはありません、幻想卿最速は伊達じゃない！と言う事で追いかけますねえ！！」

「あ、おい！！・・・はぁ・・・何も起きなければ良いが・・・」

慧音は自分の予想が的中しない事を祈るだけであつた。

薪はいらんかね？（後書き）

シリアス？今回は関係ない・・・答

薪売り最後の一軒（前書き）

ほのぼの

薪売り最後の一軒

魔法の森を疾走する2つの影、片方は重そうな鎧を身に付けながらも木の上、つまり枝を足場に恐ろしいスピードで走っており、片方は黒い羽根で彼女の後を追っていた。

それにしても恐ろしい速さだ、ぶつかれば大けが、またはそれ以上かもしれない。

「ええい！ピントが合いませんね！！」

『ふはは、烏天狗如きが私を捕えられるか！』

風神少女と無名の神の追いかけた。人間の眼でギリギリ捕えられるかどうかのスピードで疾走する彼女達。お互いにその手にはスぺルカードを握っていた。お互いの進路を妨害する為である。

「ッ流石天魔様のご友人、ですが私も幻想卿最速を自負する身、そう簡単には取材をやめませんよお！！」

『あのロリ娘と私を比べるか？天魔など私の足元にも及ばぬわあ！』

天魔、天狗の長だがその容姿が完全に少女なのであまり表に出て来ない引き籠り、朝霧とは生前からの付き合いで葬式にも招かれた。大きな黒い翼を持ち、天狗の大扇と言うモノを持っている。長い黒髪で大天狗達も絶対に逆らえないほどの力を持つが、河童の科学、ステルス迷彩を手に入れてからは良く抜け出す。

『お遊びはこれまでだ、私は薪を売っているのね、さらば』

その言葉と同時に彼女は霧霞のように消えて行ってしまった。まるで先ほどまで此处に居た彼女は幻のように。

「あ、あやや・・・吸血鬼の持つ霧散と同じ技ですか・・・コレは気配でも気が読めませんし・・・柩にでも頼みましょうかね・・・」
流石のパパラッチもコレは諦めたようだ。

人形使い、アリスの家。今日も彼女は自身が魔界から持って来た魔導書と呼んでいた。流石魔界の魔導書と言うべきか内容が変化し、別の記述についても調べる事が出来る。

興味深い記述を見つけてはソレを溜めして見る。以前作った実験中【ゴリアテ人形】も完全に自立は出来なかった。今ではあまりの大きさに家の地下で保管している。地下の広さは得意の魔法で何とかした。

そんな彼女は片手に持っていた紅茶をいっぱい呑み、もう一度グリモワールに目を落とそうとする。その時、玄関を叩く音が聞こえた。

「（こんな時間に珍しい、一体誰かしら・・・？）」

膝掛けを椅子にかけて玄関に向かう、廊下はやはりと言うべきか冷たかった。冷え切った空気が身を切る。

「誰かしら？」

『私だ』

「朝霧？名をいいなさ．．い．．よ．．．？」

ドアを開けるとそこには完全武装の鎧が立っている。その光景にアリスは眼を白黒させた。

『やっぱり脱いだ方が？』

「当たり前でしょう！？怖いからその恰好でウロウロしないで！」

『．．．わかった』

若干落ち込み気味の朝霧は鎧を解除して普通の着物に姿を変える。白銀の髪が降る雪と合わせり綺麗に輝いた。

「で、どうしたのよ？」

『薪は足りているか？』

「薪？．．．どうだったかしら、最近確認もせずに使っていたから．．．」

やはり、寒いらしい。それほどまでに無意識に使っているのである。う。こいしは関係ないとして。

『薪を売っているんだ、1本5円程度でな』

「外の通貨なのね」

『どちらでも良いのだが、今の幻想卿では円の方が使われているだろっつゝ』

以前、紫が思い付きで急に通貨の単位を円にしたのだ。境界が弄られた事によってどちらでも買える物が可能だ。

「へえ・・・そうね、数本買っておこうかしら」

『おう、買っとけ』

「でも、何故貴女が売っているのよ？」

『知り合いの娘さんに頼まれてね』

相も変わらず、不明な人脈関係だ。まあ、里の人間の相談役もやっているのだから当たり前かもしれないが。

『丁度此处でリストに乗っているのは最後でな。それなりに売れた』

「全く、その恰好で回っていたの？」

『幻想卿では常識など紙きれ同然だろう』

「それ、多分貴女と山の巫女位だと思うわ」

朝霧は何処に持っていたのか薪置き場に薪を積み上げると、料金を受け取ってアリスと少々の雑談をし、そのまま帰って行った。帰りに永遠亭によって薬を買い、娘さんの所へ戻った様であった。

ただし、次の日の新聞には鬼武者復活か、と言う文の記事が大騒ぎを起こした事は言うまでも無い。

薪売り最後の一軒（後書き）

どうしようか、後書きにも前書きにも書く事がない・・・。

母さん【が】迷子です（前書き）

2012年年末に人類が滅亡云々かんぬん

母さん【が】迷子です

崩れ落ちた廃墟に、一人の若者が眠っている。その若者の手足には酷い傷があつた。一体誰がこんな事をしたのか、考えても答えを知る者はいない。若者の首には銀のネックレスが垂れていた。恐らく彼の名前を刻んだ物であろう。可哀そうに彼にも家族がいただろうに、彼の眼の前には現れたのは一人の吸血鬼、不思議な髪色をした彼女はニヤリと口角を上げて、彼にこう言葉を掛ける。

「此処はどこ？」

「え？」

「え？」

不思議な髪色を持つ彼女は、現在迷子だ。宝石の様な羽と、蝙蝠の羽を広げて銃弾飛び交う世界を彼女は右往左往としている。たまに銃弾が当たるとそちらの方向に弾幕を飛ばし、鉄の塊などを破壊する。

「（此処は何処なの・・・助けて朝霧！紫でも良いわ！！）」

普段屋敷に引き籠っている彼女の名は紅い月、レミリア、フランの母である。

「あや？アレは・・・まさかどちらかの軍の兵器ですかね？コレはスクープかもしれません！！」

「あら？貴方は」

「ひつは、早いですねえ」

紅い月の眼の前に居る少女は黒い髪にアナログのカメラを構えていた。その容姿はどう見ても幻想卿のブン屋事射命丸である。紅い月は彼女の存在を確かめると、ほっと一息吐いた。

しかし、慣れた幻想卿の匂いがしない。幻想卿住民ならすぐに解る筈だが……。

「貴女、名前は何と言うのかしら？」

「わ、私は射命丸綾々と言います……は！これはもしかや尋問ですか！？」

「何処にわざわざ日本語で尋問する兵体が居るの……」

「そう言えば日本語！ソレにその恰好！貴女、もしかしたら朝霧さんを知っています？」

「朝霧を知っているの！？」

以外過ぎる所から助け船は出航する。その通りであった。

——所変わって奮戦地帯から200キロは離れた場所、此処まで来るのには簡単だった。何せ紅い月が彼女を抱きしめて跳んだのだ。紅い月は若干の疲労を見せるが、一方で綾は楽しそうである。

「あやや、どうもすみません。私あそこに行くまでに徒歩でして、学生ですし免許は一応あるんですがね？」

「そ、そんな事はどうでも良いのよ、貴女、朝霧を知っていると

う事は知り合いか何かなのよね？」

「?ええ、一応以前取材させていただいた程度ですが」

「その朝霧はその後どうやってこちらの世界から帰って行ったの!」

そう、知りたいのは其処だ。どうやって彼女は幻想の都に帰ったのか。自分も同じように帰れるかもしれない。

「あや、それでしたら日本まで行かなければですねえ・・・明日なら私も丁度帰国しますし、今日はそこら辺の安宿にでも止まって明日出発しましょうか!」

「え・・・でも、貴女大丈夫なの?お金もかかるのでしょうか?私飛べるわよ?」

「何を言うのですか。それでも私の家はお金を持っている方ですし、私もお小遣いをかなり溜めています。ソレに、命の恩人の知り合いさんを見殺しには出来ませんしね」

「そ、そう?貴女が良いのなら私もそれで良いのだけれど・・・」

「そうと決まれば早速宿を決めましょう!」

彼女はそう言うと言っていた地図を広げ、最も安全そうな宿を探し始めた。その速度は異常と言えるかもしれない。パパラッチをやっていると言うスキルが成長するのであろうか。

紅魔館の事は・・・心配いらないだろう。パチエも居るし美鈴も居る。まあ、咲夜がいれば間違えは無いと思うが・・・。

——安宿——

「中々な所ですね、惜しいのはベッドが固いと言う事ですか」

「ここら辺は戦時中何でしょう？それでここまで整っていれば大したものじゃない。水も出るし」

「・・・今の宿は大体こう言った場所が多いですよ？」

「あら？でも護身用の槍とかがないわねえ」

「ソレは・・・何時の時代の宿です？」

綾はそう言うつと宿の中を写真に収めた。一応、こう言った場所に泊まったと言う事を記録する為なのであろう。

簡単な食事とシャワーを済ませて、彼女達は固いベッドに横に成った、若干のスキマ風が寒いが、ソレはぜいたくは言えないと言うモノだ。しかし外の世界にもまだこれ程に優しい感情を持った少女が居るのかと思う。

翌日、眼を覚ましてそうそう、簡単な支度だけで宿を出た。何でも飛行機とやらの間に合わなくなるとか。飛行機と言う物は何なのか、と聞こうとも思ったが、焦っていたようなので聞かない事にしよう。

「人が、いっぱいだな」

「あやあ・・・物凄い視線を集めていますねえ・・・（紅い月さんは美人ですし・・・服装も独特ですから・・・）」

「?どうなの、急ぐんでしょう」

「あや!こっちですよ!」

放っておくと彼女は恐らく写真撮影の的にされそうなので急がせる。飛行機の手ケットを2人買い、旅客機の中に乗り込む。丁度隣の席が開いていたので良かったため息を吐いた。

「ね、ねえ綾。もしかしてこの鉄の塊は海の上を飛ぶのしかしら?」

「そうですね?日本は此处から遠いですから」

「ソレは・・・不味いわ・・・」

「どうしたのですか?」

汗を流しながらそれはまずい、まずいと繰り返す紅い月。

「どうしたのですか、本当に(汗)」

「私はね・・・吸血鬼なのよ?」

「・・・え?」

母さん【が】迷子です（後書き）

滅亡したら、次の知的生命体は何でしょうね（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0320ba/>

東方【IF】の平和世界

2012年1月3日22時49分発行